

再参入のパラドクス

沢 谷 豊

1 問題の所在

Luhmann を社会システム論者とよぶことには、多くの研究者が同意するであろうし、かれみずからも、その研究関心からいって、システム論者とよばれることを否定しないと思われる。しかも、かれが実在論的なシステム観をもっていることも、多くの同意がえられるであろう。Luhmann は、『社会システム理論』(1984)で、システムが実在していると述べたあとで、次のように明言している。すなわち、「システム概念は、現実になんらかのシステムであるものを指している」(訳17頁)、と¹⁾。しかしながら、その実在性の主張は、近年、大きな困難に直面しているように思われる。その理由としてあげられるのは、Luhmann がはっきりと構成主義の立場をとるようになったということがあるだろう。また、かれが全体社会の機能システムをとらえるさいにその意義を強調するようになってきた、二元コードによるシステムのとらえかた²⁾と、機能システムがみずからを観察するさいのシステムのとらえかたとがかならずしも一致するとはかぎらないということもあろう。Luhmann の社会学は、観察対象となるシステムを、その対象システムがみずから規定する自己と外部の区別とは異なる境界でとらえることになるのである。つまり、観察対象となるシステムは、自己言及の対象であるシステム自身と「外部言及」(Fremdreferenz)³⁾の対象である環境とを区別して、前者のみを自分に属するものとするのである。これにたいして、社会学は、観察対象となるシステムが自己の外にあるとする環境でさえも、その観察対象システムに属するものと判断するのである。

このことをはっきりと示すために、単純化したかたちで——つまり、後述する「再参入」(re-entry)についてはふれないで——、宗教システムを例にとってみよう。Luhmann 自身は宗教システムを超越と内在の区別によって規定しようとしているが(1986a, S. 185ff.; 1990a, S.210; 1991b)、ここでは Durkheim にしたがって、聖と俗の区別で考え

てみよう (Durkheim 1912)。そうすると、宗教システムは、みずからを聖なるものとして規定し、俗についてはみずからとは異質な秩序として区別するということになる (Luhmann 1989, S.280; 1996b, S.4)。宗教システムにとっては俗世界は外部の環境なのである。これを第一段階の観察としよう。これにたいし、そうした観察のあり方を、社会学のような外部の立場から観察するならば——この観察は、先の第一段階の観察をさらに観察するという意味で、第二段階の観察とよぶことにしよう⁴⁾——、聖なるものばかりでなく、宗教システムが環境として規定した俗なる世界も宗教システムにふくまれることになるのである。というのは、俗世界というものは、聖なる世界との対比ではじめて意味をもつものであり、宗教システムがみずからを定義することとの相関項としてつくりあげたものだからである。このように、環境とはシステムがつくりあげるものなのである。したがって、素朴な第一段階の観察では、宗教システム自身にとって環境であったはずの俗世界も、第二段階の観察では、宗教システム自身に属するものと判断されるのである。さらにいうならば、宗教システムが反省能力を高めてみずから第二段階の観察をすることにより、先に述べた理由で、聖なる世界ばかりでなく世俗の世界も宗教的世界であると判断することも可能である。

自己観察にともなうこのようなシステム境界のずれという現象は、他の機能システムにもみられる。Luhmann によれば、科学は真理と非真理という二元コードにもとづく機能システムである (1990a, S.194ff.)。そのさい、たとえ科学システムが第一段階の観察により、真理のみを自己に属するものと考えたとしても、それはある意味では当然のことである。しかし、科学システムがさらに自分自身の観察をみずから観察することによって、非真理をも自己にふくまれると判断することもできるのである。すなわち、科学が第一段階の観察により自己をとらえるさいには、二元コードの一方の値、すなわち真理のみが自己の定義として視野に入ってくるが、第二段階の観察をする場合には、否定の値である非真理もがその視野に入ってくることになる。べつな言いかたをするならば、第一段階の観察では、科学に属するのは真理のみであり非真理は属さないが、第二段階の観察では、非真理も真理とともに科学システムの自己規定にふくまれるということである⁵⁾。こうして、第二段階の観察では、真理であるか非真理であるかの選択を行なわない作動が、科学システムの外部をなす環境に属するコミュニケーションということになる (1990a, S.209. 法システムとの関係では、1993a, S.70を参照せよ)。しかも、この二種類の観察のありかたは、外部の観察者による観察の場合ばかりでなく、システム自身による自己観察においてさえみられるのである。したがって、観察が第一段階か第二段階かによって、なにがシステムでなにが環境であるかが異ってくるといえる。

問題はさらに複雑化する。たとえば、宗教システムが、聖と俗の区別をもとにしたコミュニケーションをみずからに属するものとし、その区別を用いないコミュニケーションをみずからとは異質な環境であると規定したとする。しかしながら、Luhmann にした

がえは、この場合の環境でさえもが宗教システムに属することになると思われるからである。この点については本論で言及するが、かれにしたがえば、たとえば、科学システムの例で、科学システムが真理ばかりでなく非真理にかかわる作動をもみずからに属するコミュニケーションとし、真理・非真理の区別にかかわりのないコミュニケーションを環境に属するものと規定した場合であっても、その環境そのものが科学システム自身の構成であるという意味で、科学システムにふくまれることになる。同様に、法システムが、システム自身による第二段階の観察により、法ばかりでなく不法にかかわるコミュニケーションをもみずからの作動とし、それ以外の環境から自己を区別した場合でさえも、その環境までもが法システムにふくまれるものとされる⁹⁾。機能システムがみずからつくりあげる環境について、(Kneer/Nassehi 1993)にまとまったわかりやすい記述がある。「自然環境の破壊という問題について、宗教はそれを神の創造物に対する侵害とみたり、場合によっては、神が罪に対する報いとして行なう創造物への介入とみることができる。それに対して経済は、将来の投資に有利か不利かということだけをみる。政治はそこに票集めをするときの決定的要因をみる。教育は、問題を個人の誤りに帰すので、エコロジ的な教育プログラムの必要を力説する。そして、芸術はそこに、世界を芸術的に表現するための新しいテーマを発見する」(訳173頁)のである。つまり、同じく自然破壊——これはすべての機能的に分化した社会システムにとって環境である——を問題にしている場合でも、それぞれの機能システムは、みずからの二元コードをもとに、独自の環境をつくりあげるのである。

こうしたことは、当然ながら、Luhmann の社会システム論にたいしてさまざまな疑問を生じさせることになる。システムと環境との境界が一義的に画定できないからである。Luhmann のいう社会システムは、現実中存在する実在的なシステムなのだろうか。もしくは「存在する」という表現がなんらかの特殊な意味で用いられているのだろうか。また、社会システムとは観察者によるたんなる構成なのではないのだろうか。それとも、なんらかの現実的な基礎にささえられているのであろうか。Luhmann は、かれのシステム論が、観察対象となるシステムよりも認識論的にすぐれた立場にあると主張しているのだろうか。しかし、かれにしたがえば、そうした特権的な立場は近代社会には存在しないはずではなかったのか。

2 構成主義とオートポイエーシス・システム

こうした疑問に答えるために、まず、Luhmann の構成主義的認識論の立場からみていこう。

Luhmann がその構成主義的立場をはっきりとうちだすようになったのは、1988年の『構成としての認識』からであると思われる。かれは次のような前提から議論を開始す

る。すなわち、「すべての認識システムはある現実的な環境内の現実的なシステムである」(1988b, S.13. 同様の指摘としては、1990b, S.41 も参照せよ)、と。この前提では、まず第一に、システムの実在が素朴なかたちで述べられている。より限定しているならば、オートポイエーシス・システムが存在しているということである。かれにしたがえば、オートポイエーシス・システムとは、みずからの要素をその要素のネットワークによってみずから生産・再生産する、作動的に閉じたシステムである(1985, S.403; 1988c, S.166; 1990a, S.30)⁷⁾。もちろん、この場合の生産ないし再生産とは、もともとある素材を用いてつくるということである。社会システムが、いかにコミュニケーションのために必要であるとはいえ、文字を見るために必要な光をつくったり、音の振動に必要な空気を生産したりすることはない。社会システムは、その要素であるコミュニケーションのネットワークによりコミュニケーションを生産・再生産し、そしてそのかぎり、作動的に閉じたシステムなのである。

この前提にふくまれる第二の注目すべき点は認識である。Luhmann は、観察という概念をもとにして認識概念を定義する。観察とは、かれによれば、ある区別をもとに、その区別によって作りだされる両側のうちの一方を指示することである(1986a, S.299; 1988b, S.14f.; 1990a, S.73; 1991a, S.84; 1993a, S.26; 1995a, S.99)。区別と指示という二つの契機が統一されることによって、はじめて観察という作動がなりたつものとされる⁸⁾。そして、認識については、観察とその記述(記憶)という二つの契機によって定義する⁹⁾(1988b, S.14f. また、多少異なる定義ではあるが、1990b, S.40 も参照せよ)。

ここで Luhmann のいう観察概念についてとくに指摘しておきたいことは、まず、観察には区別という契機が不可欠だということである。区別がなければ観察は不可能なのである¹⁰⁾。指し示すことが可能となるためには、少なくとも、指し示される対象とは区別される観察者が必要なのである。ここで観察者を自己と表現するならば、自己のほかに自己と区別されるもの(外部)が必要なのである。自己を指し示すことでさえ、自己とは異なるなにもものかがなければ不可能なのである。このような区別を前提にして、はじめて外部にあるさまざまな対象をさらに区別し観察することが可能となる。環境の中に存在するさまざまなシステムも観察できるようになるわけである。

次に指摘しておきたいことは、現実というものが、観察という作動をもとにつくりあげられるとされている点である。生物学の研究によれば、神経システムはクローズド・システムであり、生物による観察は内部構成である。いわゆる「世界」には、観察に対応するものはない。社会システムについてもこれは同じである。観察による内部構成がないならば、システムも存在しないし環境もない。もう少し正確に言うならば、システムと環境の区別をもとにした観察がないならば、システムも環境も存在しないということである(1988b, S.16; 1990b, S.50)¹¹⁾。システムの存在は、システムと環境との区別という観察図式を用いるかいないかに依存する。したがって、この意味でのシステムは「分

析的」システム概念であるということもできよう。とくに、認識には誤りの可能性もふくまれるということを考えるならば、観察により構成されるシステムは、実在的なシステムとは直接的な関係はないともいえよう(1994, S.479)。

しかしながら、Luhmann は、そうした「分析的」システム概念に甘んじることはない。かれは、観察は一度かぎりの個別的なできごととしては不可能である、とする。観察が可能となるためには、観察というできごとのネットワーク、すなわちシステムが必要だというのである(1990b, S.9; 1991a, S.240f.; 1996b, S.13f.)。つまり、システムの存在は観察にもとづくが、逆に、この観察そのものもシステムなくしては不可能だというのである。観察とシステムとは、たがいに他を前提するという意味で循環的な関係にあることになる。

まとめておこう。第一はオートポイエーシス・システムの実在にかかわる。オートポイエーシス・システムはそのオートポイエーシスという作動に関しては閉じたシステムとして環境から区別される。もちろんこのことは、たとえば、因果関係やエネルギーといった側面での閉鎖性を意味するものではない(1984, 訳 44 頁; 1990a, S.276f.; 1995e, S.15)。生物が大量の放射線をあびれば、その生命を維持することは困難となろう。オートポイエーシス・システムの閉鎖性は、そのオートポイエーシスそのものに関していわれる閉鎖性である。つまり、システムのオートポイエーシスの継続に必要なすべての要素をシステム自身がそのネットワークをもとに生産・再生産するということである。第二は観察にかかわる。観察はオートポイエーシス・システムの作動を用いてなされる内的構成である。そのさい、システムは、外部から情報をうけとることはできない。観察内容にかかわるかぎりでは、システムばかりでなく環境の存在も、システムの内的構成なのである。もちろん、そのさい、構造的カップリングという現象がみられるわけであるが、Luhmann は、一般に外部の影響と考えられているノイズでさえも、システム自身による内的構成であるとしている(1990a, S.40)。

Luhmann は、社会システムもこのようなオートポイエーシス・システムであるとする。社会システムのオートポイエーシス・システムとしての実在性を主張するためには、社会システムがその固有の作動による閉鎖性を——社会システムの特殊性をより重視して言うならば、意味的世界における作動としての閉鎖性¹²⁾を——実現しているということを、観察により示さなければならない。しかも、全体社会についていうならば、それを外からみることのできる観察者——たとえば、主体といったもの——が想定されていない。したがって、全体社会システムの存在を観察するのは社会システム自身であり、それゆえ、観察は内部観察でなければならない、ということになる。

3 オートポイエーシス・システムとしての全体社会

Luhmann にしたがえば、全体社会というもっとも包括的な社会システムの要素はコミュニケーションである。作動から説明を開始するならば、固有の作動のネットワークが形成されることによりシステムが発生するのだから、コミュニケーションという作動が結びつけられることにより、全体社会システムが発生することになる。コミュニケーションとそれ以外のものとのちがいが、全体社会の境界を定義する。

ここでまずでてくると思われる疑問は、なぜ全体社会の要素はコミュニケーションであって人間ではないのかということである。これにたいしては、人間ということばがどのような意味で用いられているかが問題である。それが生物としての人間という意味であるならば、社会システムの要素が人間であるということはあるにない。というのは、オートポイエーシス・システムは、みずからの要素をつくりだすシステムであるとされているからである。社会システムが生物としての人間をつくることなどはない。したがって、社会システムの要素は人間ではないのである。また、コミュニケーションをするのは人間ではないかという反論も当然予想されよう。伝達にしても、情報にしても、理解にしても、人間なくしては考えられないではないか、と¹³⁾。それにたいしては、Luhmann は、社会システムと心理システム——人間ではない——の関係として答えようとする。コミュニケーションをその要素とする社会システムと、思考をその要素とする心理システム、つまり意識は、たがいに他を環境とする独自のオートポイエーシス・システムであり、そして、両者の関係は言語により構造的にカップリングされているとするのである¹⁴⁾。心理システムは言語を用いて思考する。しかし、思考そのものは心理システムの作動であり、社会システムにとっては環境に属するできごとである。それが社会システムになんらかの影響をもたらすことはあるにない。つまり、ある一定の思考内容は、それがどのようなかたちであれ伝達されることがないならば、社会システムにとっては存在しないことと同じなのである(1990a, S.22)。しかしながら、その思考内容がひとたび伝達されてしまうならば、それはコミュニケーションの構成要素となってしまう。思考内容の伝達は、それがどのように理解され、どのようなコミュニケーションに接続されていくことになるかという点に関しては、伝達した個人の手を放れてしまう。したがって、Luhmann は、思考は社会システムの要素ではなく、コミュニケーションだけが社会システムの要素であるとするのである。逆に、意識の立場からするならば、意識みずからが、コミュニケーションをしているのは自分自身であると考えることがある。しかし、そうした思考そのものは意識の内的作動であるということになる(1988e, S. 885)。

さらに説明を要することとしては、コミュニケーションがいかにして接続されるのか

という重要な問題もあるが、ここでは、コミュニケーションは現に接続されているという事実を確認するにとどめよう。いずれにせよ、作動としてのコミュニケーションは、コミュニケーションと非コミュニケーションとを区別して、コミュニケーションのみに接続していくことになる。Luhmann のいう基礎的自己言及である。ここで留意すべきことは、このコミュニケーションと非コミュニケーションの区別が、作動の performativ な側面にかかわる区別であり、作動による観察内容、すなわち konstativ な側面にかかわる区別ではないということである。観察内容からするならば、環境についてのコミュニケーションと、コミュニケーションについてのコミュニケーションは、外部言及と自己言及というかたちで区別される。しかし、performativ な側面からするならば、両者ともにコミュニケーションなのである。そして、さらなるコミュニケーションへと接続されて、ネットワークとしての社会システムを構成していく。

Luhmann にしたがえば、そのようにして成立した社会システムは、みずからの要素であるコミュニケーションとみずからの要素ではない非コミュニケーションとのちがいに注目して、システム自身と環境とを区別することができるようになる。これがシステム・レベルでの自己言及である¹⁵⁾。もちろん、そのさい、社会システムは、みずからと環境との境界を、社会システムみずからが構成した区別にしたがって設定するのである。すなわち、社会システム自身にかかわるコミュニケーションと、環境にかかわるコミュニケーションとの区別を、社会システムとその環境との区別としてとらえるのである。ここで重要なことは、くり返しになるが、全体社会もクローズド・システムである以上、作動によってシステムの「外」に到達することはできないということである。全体社会が行なう観察にしても、それは内部観察以外のものではありえない。したがって、そこで用いられるシステムと環境の区別も、——システム自身によっては自覚されていないかもしれないが——自己言及と外部言及というかたちをとらざるをえないのである。というのは、外部といえどもコミュニケーションという作動の制約のもとに、コミュニケーションのテーマとして構成された外部であり、全体社会自身による言及だからである。社会システムは、自己の作動によって構成された自己の一部を、自己に属さない外部として構成する——外在化する——わけである。作動のネットワークにより構成されるシステムと、その作動以外のものとの差異を、システムは、自己言及と外部言及という内部の区別によってとらえる（とらえそこなう）わけである。全体社会とその環境との差異は、社会システムにはみえていないことになる。

したがって、全体社会というクローズド・システムの観察は、システム自身に関する観察であれ、その環境についての観察であれ、つねに全体社会の内部の観察というかたちをとる。全体社会と環境との境界も内的境界である。いわゆる現実¹⁶⁾というものも、全体社会の内的構成ということになる。観察とはつねに内部観察なのである。それゆえ、Luhmann の社会システム論——社会学——が観察・記述しようとする対象も、つねに全

体社会の内部構成にかぎられることになる。Luhmann の社会学は、みずからも全体社会の要素であるコミュニケーションから成りたつものであるが、その観察対象も、全体社会の要素であるコミュニケーションのみに限定されている¹⁷⁾。Leibniz 風に言うならば、全体社会には「窓がない」(1996d, S.297)からである。

それでは、全体社会が外部の対象を認識することは不可能なのであろうか。Luhmann は、これまでの認識論は、認識と対象を区別し、いかにして認識は対象にいたることができるのかという解決不可能な問題にかかわってきた、という(1990b, S.51)。この対象が、認識システムの作動とは区別される環境の——全体社会システムの外の——対象を意味する場合には、認識はそれに到達できない(1990a, S.307)。というのは、オートポイエシス・システムはみずからの境界内でしか作動できないからである。コミュニケーションは全体社会の環境には到達できない。したがって、自然現象のような対象を認識が模写することははじめから不可能であるとされる。構成主義の立場にたつならば、認識と対象の区別とは、システムが観察をおこなうために設定した区別にほかならない(1990b, S.51)。認識も対象もシステム自身の内的構成なのである。観察とは、環境との接触能力をもたない盲目的な作動なのである(1988e, S.896; 1990b, S.38)。近似的な言い方をすれば、つまり、非言語的コミュニケーションにふれないならば、社会システムの要素であるコミュニケーションは、言語というシンボルによって仲介された意味的作動なのであり、たとえば人間が五感によってとらえることのできる現象などが——もちろんこれも頭脳を中心とする神経システムによる構成であるが——そのままのかたちで社会システムのコミュニケーションにもち込まれることはない、ということである¹⁸⁾。社会システムは、たとえば人間が見ることのできる自然に、コミュニケーションという作動によって到達することはできない。そうした現象は、言語化されることによりはじめて社会システムの要素となりうるわけである。社会システム自体は知覚能力をもたない(1988e, S.893; 1990a, S.20, 225)。

ただし、こうした構成主義が独在論の主張であると解釈されてはならない(1988d, S.297; 1990a, S.305; 1990b, S.57)。社会システムは人間の意識という環境なしにはありえないであろうし、人間の視覚による観察も、たとえば自然環境なしにはありえない¹⁹⁾。そもそも、システムと環境は物質的な面からするならば連続体なのである(1990a, S.30)。たとえシステムの認識がみずからの作動をこえた現象に到達することが不可能だとしても、そのことは、認識の外になにも存在しないということを意味するものではない。Luhmann は、システムがその中に包み込まれている「環境」の存在を、はっきりと肯定している(1990a, S.276; 1996a, S.18)。

4 全体社会の部分システムとしての機能システム

システムが観察をするためには、システムはみずからと環境を区別しなければならない。もう少し正確にいうならば、システムと環境の区別をシステム内で構成しなければならない。これを Luhmann は、Spencer-Brown にしたがって再参入とよぶ。

Luhmann は再参入をパラドクスであるとする。社会システムの再参入のパラドクスは次のように再構成することができるだろう。まず、全体社会の中に、その機能をになう複数の機能システムが成立する。この機能システムを観察するにあたっては、その機能システム自身が自己をどのように規定しているかが優先されなければならない。認識は対象にそってなされなければならない²⁰⁾(1990a, S.289f.; 1991b, S.942. 宗教との関係では、たとえば、1996b, S.8 を見よ)。この要請が Luhmann 理論の大きな特徴となっている。こうした機能システムが、他の機能システムを観察すると——典型的な場合は科学システムによる観察である——、すでにみたように、観察対象となるシステムの自己規定にもとづく境界、すなわち対象システム自身からみた自己と環境との境界と、そのシステムの作動的閉鎖性によって画される境界——外部のシステムからみた対象システムとその環境との境界——との間にくいちがいがみられることになる。観察対象となるシステムは、みずからの作動とそれ以外の外部環境との差異と、自己言及と外部言及の区別とを同一視するのである。外部の観察者にとっては異なるこの二つの境界が、観察対象自身にとっては同じものにみえるのである。これが統一体としての社会システムのレベルであられる再参入のパラドクスである。

先に述べたように、オートポイエーシス・システムは、その構成要素のすべてをみずから生産・再生産するクローズド・システムである。Luhmann によれば、全体社会はコミュニケーションのもっとも包括的なシステムであり、その閉鎖性は、コミュニケーションという独自の作動によって確保されている。全体社会は、意味ならびに意味以外のさまざまなメディア——形式との区別で用いられるメディア(1990a, S.53ff.; Fuchs 1994, S.21ff.)——の中で、その環境には存在しないコミュニケーションという独自の作動をつくりあげることにより、みずからをクローズド・システムとしてつくりあげるのである。また、かれによれば、近代社会は機能分化が優位にある社会である。この機能分化とは、全体社会内部での、それぞれある特定の機能をになう部分システムへの分化であり、しかも、この部分システムも現実的なオートポイエーシス・システムである。したがって、そうしたシステムも作動的に閉じていなければならない。そこで問題は、そうした部分システムに固有の作動ということになる。Luhmann によれば、各機能システムに固有な作動は、それぞれの二元コードによって確保される²¹⁾(1990a, S.308f.; 1993a, S.67ff.)。そこで、機能システムの二元コードについて検討することにしよう。

Luhmann は、近代社会の機能的に分化した部分システムとして、具体的には、経済や、科学、法、芸術、マスメディアなどのほかに教育、宗教、政治、医療などをあげている。そして、それぞれの機能システムに固有の二元コードがあるとするのである²²⁾。かれは、数多くの著作や論文で、機能的に分化した部分システムのコードに言及している。そうした二元コードとして、たとえば、経済システムについては支払い・非支払いを(1988a, 訳224-247頁)、科学システムについては真理・非真理を、法システムについては法・不法を(1986b; 1993a, S.165ff.)、マスメディアについては情報・非情報を(1996a, S.32ff.)、教育システムについては良い評価・悪い評価を(1986a, S.195; 1986c, S.165)、宗教システムについては超越・内在を、政治システムについては政権党・野党を(1990b, S.185)、また、医療システムについては病気・健康を(1990b, S.183ff.)をあげている。そうした二元コードを主導的区別として用いることにより、機能システムは、みずからとその環境の中で、関連性のある情報をさがしまわるのである(1991a, S.236)。すなわち、そのコードを基礎とした独自の世界観察がなされるわけであるが(法システムとの関連では、たとえば、1993a, S.84f.を見よ)、この二元コードは同時に、システムの自己規定にも用いられるとするのである。

よりくわしくみていこう。基本的な問題は、いかにして全体社会というコミュニケーション・システムの中に、新たに部分システムが分化できるのか、ということである。全体社会のコミュニケーションを分断し、みずからの境界を設定して、自己言及と外部言及を区別するような機能システムが、いかにして発生するのかということである。Luhmann は、それを二元コードによる基礎的自己言及によって説明しようとするわけである。「システム論的な自己言及と外部言及の区別だけでは、いかにしてその自己が自己を規定するかということについてはなにも確認されていない。べつな言いかたをすれば、いかにしてシステム内における作動の接続可能性は認識されるのか、そして、いかにしてシステムと環境の差異は生産され、不断に再生産されるのかということについては、なにも確認されていない。これは、機能システムという典型的な場合では、……第三の可能性を排除することで肯定的な値と否定的な値を確定する、二元コードによってなされる。肯定的な値は、システム内であたえられている作動の接続可能性を示すものであり、これによってなにごとかを開始することができるようになる。否定的な値は、肯定的値を確定するための条件の反省に役だつだけである」(1996a, S.35)と²³⁾。そしてかれはいう、「この特殊な差異の統一であるコードは、どのような作動がシステムに属し、どのような(他の方法でコード化された、ないしは、コード化されていない)作動がシステムの環境を経過しているのかを規定するためには十分なのである。すなわち、コードとは、システムと環境の区別にもとづく自己観察をはじめて可能とする区別なのである」(1996a, S.36)、と。

否定的な値は反省に役だつだけであるということなので、事態を単純化するならば、

次のようになる²⁴⁾。まず、二元コードの肯定的な値にもとづく作動のネットワークが基礎的自己言及によって確認される。たとえば、経済ならば、非支払いと区別された支払いをさらなる支払いに接続させ、そのコミュニケーションのネットワークを形成する。法についてのコミュニケーションは、すでに判例として認められている判断や、ある一定の法律をもとにして下されるであろう判決などを考慮しつつ、法的コミュニケーションのネットワークをつくりあげる。科学ならば、非真理とは区別される、新たな真理を獲得するためのコミュニケーションが継続されていく。すなわち、まず、基礎的自己言及のレベルにおける観察をもとに、特定の二元コードに還元されるコミュニケーションが結びつけられ、ネットワークが形成されるわけである。このことが可能なのは、個別的な作動レベルでの観察があるからである。つまり、作動に konstativ な側面があるからである。時間的に先行する作動を観察し、後続する作動を考慮することによって、できごととしての作動は接続可能性をもつことになる。二元コードが十分に制度化されることにより、作動はみずからと同類の作動とそれ以外の作動を区別することができるようになり、この観察にもとづいて、同種の作動と接続していくのである。そのさい、二元コードの制度化にあたっては、コードの値を決定する基準となるプログラムも必要となってくる²⁵⁾。

次に、このようにして成立したネットワークが、システムとしての自己言及的規定を行なう。固有な二元コードのネットワークが、自己をたとえば経済システムや、法システム、科学システムとして規定し、その環境から区別するようになるのである。ただし、このようなコードとシステムとの関係は一方が他方の原因であるといったような、直線的な因果関係にはない(1986a, S.85f., 152f.)。議論が錯綜しているが、ここで確認しておきたいことは、ネットワーク全体としての自己規定にさいしては、作動レベルでの接続のために用いられた、自己と同種の作動かいなかという区別が、自己と環境を区別する図式として用いられているということである。こうした区別によって、機能システムは、自分自身と環境を構成することができるのだというのである。機能システムが自己観察をするさいには、二元コードだけでは不十分で、さらに図式としてのシステムと環境の区別が加わらなければならないとされている。一般にシステムが自己を観察できるようになる条件について、Luhmann は次のように説明している。「システムがみずからを観察するためには、みずからとその他いっさいのもの、すなわちその環境とを区別しなければならない。システムの rekursiv に結びつけられた作動は、境界を引き、それによりシステムと環境とを区別する。自己観察という作動のためには、この区別をシステムみずからの中へ再参入(Spencer-Brown の意味で)させなければならない。すなわち、システム内でシステムと環境を区別する作動を必要とするのである」(1993b, S.772)。システムは、システム自身とその環境の区別をコピーして自己の内にもちこむのである(1995a, S.206 ; 1996a, S.24 ; 1996b, S.14)。このようにして、自己の内容を実質的に規定

し、自己言及と外部言及とを区別する機能システムが発生する。

先に述べたように、Luhmannはこの再参入をパラドクスであるとする。「再参入はかくれたパラドクスである。というのは、再参入は、異なる区別（システム・環境の区別と自己言及・外部言及の区別）を同じものとして扱うからである」（1996a, S.26. 同様の指摘としては、1990b, S.205f.; 1995b, S.42を参照せよ）、と。通常の第一段階の観察では、システムにはこの二つの区別のちがいがみえないのであり、したがって、再参入という現象もみえてこない。

ところが、外部のシステムが、固有の二元コードをもとにして自己と外部を区別して観察を行なう他の機能システムを観察するならば、この再参入の現象がみえてくる。そこで、科学システム——より具体的には、Luhmannの定義にもとづく社会学、すなわち社会システム論であるが——に、ほかの機能システムがみずからとその環境をどのように観察しているかを、観察させてみよう。外部からの第二段階の観察である。そうすると、二元コードをもとに構成された対象システム自身による自己（システム）と外部（環境）との区別は、観察対象となっているシステム自身の内的構成であり、その自己言及と外部言及との区別にすぎないということが明らかになる。システムの境界は自己言及と外部言及の境界にではなく、作動の閉鎖性と一致するからである²⁶⁾。外部の観察者には、再参入のパラドクスがはっきりとみえることになる。第一段階の観察と外部システムによる第二段階の観察とでは、システムと環境の境界が異なってくるわけである。そのさい、観察対象となるシステムがどのような基準のもとに自己と環境を区別しようとも、事情は同じである。つまり、二元コードの肯定的な値と否定的な値の区別を自己と環境の区別であるとした場合でも、肯定・否定の両方の値をふくめた特定の二元コードの統一とそれ以外の二元コード、ないしはコード化されていないコミュニケーションとの区別によって、自己と環境を区別しようとも、再参入のパラドクスはさけられないのである。いずれの場合にも、観察対象となるシステムによって外部言及の対象とされる環境とは、そのシステム自身の内部構成だからである。したがって、システムを研究するさいには、対象となるシステムの自己言及ばかりでなく、そうしたシステムが固有のしかたで構成した環境をもとりあげなければならないわけである。というのは、そうしたシステムによって構成された環境は、実際には、システムの自己観察と同時に外在化された、システムの内的作動だからである。システムを研究するためには、「システムと環境の差異の統一」（Einheit der Differenz von System und Umwelt）をその対象としなければならないわけである（全体社会との関係では、1986a, S.23を見よ）。

さらに、この例で第二段階の観察を行なった科学システム自身も、みずからと環境とを区別し、それにもとづき観察をするシステムであるという事情が加わる。つまり、科学システムは、他の機能システムを観察していたはずであるが、実は、それらの機能システムは科学システム自身の環境内に存在するシステムであり、科学システム自身によ

る内部構成であるということにならざるをえないのである。第二段階の観察も基本的には第一段階の観察であり(1989, S.334; 1990b, S.15f.; 1991a, S.242)、したがって、第一段階の観察と同じ盲点を共有している。科学システム自身にしても、外部から情報をとり入れることはできない。したがって、科学システムにとっての環境——観察対象——は、真理と非真理という区別を主導的区別として用いる、科学システムに固有の観察によって構成された外部言及であるということになる。

一般的に言うならば、システムが環境を観察するためには、みずからの内部を自己と外部とに区別し、そして、その外部を環境として外在化することが必要である。つまり、システムが観察する環境とは、システムの内的構成であり、したがって、システム相関的な環境なのである。環境は観察なしにはありえないし、システムも観察なしにはありえない。

システムは観察をすることができるわけであるが——もちろん内部観察である——、そのためには、みずからを観察する部分(システム自身)と観察される部分(環境)に分割しなければならない。それは社会システム以外の領域にもあてはまる。自我がみずからを観察するためには、観察する自己と観察される自己に分裂しなければならない²⁷⁾、人間がみずからを視覚的に観察するさいには、みずからの身体とそれ以外のものを区別しなければならない。さらに、宇宙がみずからを観察するためには、物理学者と観察道具を必要とする(1993c, S.204f. また、1990a, S.303; Spencer-Brown 1994, 訳122-3頁も参照せよ)。

5 システム境界と解釈

しかし、なぜ、機能システムは、自己言及と外部言及の区別を自己と環境の境界として画定し、自己の一部である環境を外在化することになるのであろうか。なぜ、外部の情報を直接とり入れることができないのであろうか。それは機能システムがオートポイエーシス・システムであるとされているからである。

ここで、社会システムのオートポイエーシスについて Luhmann 自身がとる立場を確認しておこう。社会システムのオートポイエーシスについては、たとえば Teubner (1987; 1989)のように、ゆるやかなオートポイエーシスを認める立場もあるが、Luhmann 自身は、厳密なオートポイエーシスを堅持しようとしているように思われる(1987, 訳 119-120 頁; 1990b, S.216f., Anm. 41)。また、すでに述べたように、オートポイエーシス・システムは、みずからの要素のすべてをその要素のネットワークにもとづき生産・再生産するシステムでもある。Luhmann の描く近代社会は、このような、システムとしては作動的に閉じているが、その内的作動によって自己と外部を区別する、機能システムが併存する社会であるように思われる²⁸⁾。しかも、全体社会の中でこのように

機能的に分化したオートポイエーシス・システムは、自律的システムであり、したがって、外部からの統制を受けないし、機能システム間で直接的にコミュニケーションをすることもないとされる²⁹⁾。

しかし、機能システムは厳密なオートポイエーシス・システムであろうか。まず気になる点は、Luhmann が作動レベルでの閉鎖性を強調する反面で、かれ自身が機能システムに固有な二元コードを提示するさいにゆれがみられるということである³⁰⁾。それは、とくに第二コードとの関係で顕著である。たとえば、貨幣による経済システムの第二コード化、すなわち、支払いと非支払いのコードによる所有と非所有のコードの補完によって、はじめて経済システムは完全に機能的に自立化するとされていたのが(1986a, S. 103)、ふたたび、所有と非所有のコードに言及されたりすることがある(1992a, S.40)。さらには、宗教の第二コードとして道徳があげられるばかりでなく、政治の第二コードとして法があげられる場合さえある(1989, S.299; 1990b, S.192)。とくに後者についていうならば、Luhmann にしたがうかぎり、政治と法とはたがいに異なる二元コードをもとに自立化したオートポイエーシス・システムであったはずである。もちろん、こうしたことがおこるのは近代的な機能システムが分化してくるさいの過渡的現象であると考えることができるのかもしれない(たとえば、政治システムとの関係では、1989, S.136 も見よ)。しかし、それにもかかわらず、疑問は残らざるをえないように思われる。

機能的に自立化したシステムの重なり合う領域の問題については、どのようにとらえられるのであろうか。たとえば、倫理学が道徳の基礎づけを試みる場合などはどうであろうか。そのさい、倫理学は、道徳のコードにしたがっていると同時に、科学のコードをも用いていることにはならないだろうか。それについて、Luhmann は、第一義的に道徳のコードを志向しているか、それとも真理のコードを志向しているかということが重要であるとしている(1989, S.359)。しかし、こうした重なり合う領域については、後続のコミュニケーションが、たとえば道徳のコードにしたがって接続される場合もあれば、科学のコードにしたがって接続される場合もあるであろう。そうなれば、そうしたコミュニケーションは、まさに機能システムの重なり合う領域に位置するコミュニケーションとなるのではなかろうか。かれ自身、こうした多機能的なコミュニケーションの存在を——さらには機能システムに所属しないコミュニケーションの存在を——認めているように思われる(1986a, S.75)。いずれにせよ、そうした領域においては、コミュニケーションの所属は、前後のコミュニケーションとの関係で、特定の機能システムへの所属が確定されることになると思われる(1988f, S.342f.; 1990a, S.32)。

しかし、それにもかかわらず、Luhmann によれば、オートポイエーシス・システムの閉鎖性は明確であるという。かれにしたがえば、特定の二元コードに還元されうる、もしくはそのコードを用いたコミュニケーションは、その二元コードによって象徴される機能システムの作動なのであり、システム間の閉鎖性は確定できるのである。しかし、

特定の二元コードに還元されるコミュニケーションとはどういうことであろうか。はっきりと言うならば、あるコミュニケーションを特定の二元コードに還元するには、解釈をとまなう理解がなければならないのではないだろうか。だれが理解をするのか。もちろん、Luhmann ならば、コミュニケーション、もしくはそのネットワークである社会システムが理解するというであろう。それでもなお疑問は残る。どの社会システムの理解なのかと。問題となっているコミュニケーションを直接自己の作動として要求する社会システムの理解なのだろうか。それとも、そうしたコミュニケーションを観察している社会システムの理解なのだろうか。しかし、解釈にせよ、理解にせよそれはそのコミュニケーションを観察しているシステムの、内的作動による構成でしかないのではなかろうか。Luhmann の社会理論における解釈や理解のもつ意義を強調したのは、Reese-Schäfer (1992, S.38, 41ff.) である³⁹⁾。そうした境界領域のコミュニケーションの解釈にあたって特権的な地位にあるのは、——すなわち、他の理解を排除しうるのは——観察ないしは解釈を行なっているシステムだけであろう。そうした意味では、たとえば科学システムにとっては、他のシステムによる解釈はノイズでしかないということかもしれない。

しかしながら、科学システムのオートポイエーシスの根底にあるものが、真理と非真理の二元コードであるという命題について、科学システム内で合意があるのだろうか。科学システムの自己規定にはその他の方法もあろう。機能システムの自己記述には、複数の記述の仕方があるということは、Luhmann 自身の認めるところである。かれによれば、二元コードは、そうした複数の定義のあり方を視野にいた、抽象的なレベルで選択されている (1991b; 1996a, S.36)。それは、定義の問題を二重化の手続きにより、不可視化しているのだと (1986a, S.76ff.)。

いずれにせよ、それぞれの機能システムの境界設定については、それがどのシステムによって行なわれるにせよ、Luhmann 理論が観察している対象に限定するかぎり、かれの理論の——もしくは社会学の——内部構成であるということにならざるをえない。このことは、實在論的な社会システムの主張が直面するきわめて大きな困難を意味しているように思われる。かれは社会システムを現実存在する対象を意味するものとしていたはずである。ところが、近年、観察図式としての社会システム論に言及するようになってきている (1994, S.479; Luhmann/Schorr 1996, S.10)。作動が接続してネットワークをつくることと、そのネットワークがみずからをシステムとしてとらえ環境から区別することとは、つまりシステムとして観察すること——これこそが Luhmann にとってシステムの存在を示すために必要な条件である——とは、まったく別なことなのではないか。かれ自身、全体社会がシステムとして自己をその環境と区別し統一体としてとらえるようになったのは、比較的最近のことであるとしている (1990c, S.420)。ある対象をシステムとして観察しているのはシステム論自身なのではないか。そうした疑問を完全

に払拭することは容易ではないように思われる。

6 結論にかえて

システムの自己言及および外部言及という再参入のパラドクスは、システムをオートポイエーシス・システムとしてとらえることと、その系として、観察がシステムの内的作動であるとする事とにより発生する。ただ、こうしたパラドクスは、Luhmann によれば、あくまでも観察に固執する観察者にとってのパラドクスであり、システムの作動にとってのパラドクスではない(1995b, S.42; 1996c, S.22, 48)。

Luhmann にしたがえば、社会学は全体社会を「内部」から観察するものである³²⁾。しかし、社会学がしめるとされるこの「内部」とはどのような位置であろうか。それは、外部である全体社会と区別される意味での内部であろうか。しかし、そうならば、全体社会は社会学の外部言及であるということになる。つまり、全体社会が社会学の内部構成ということになる。それとも、全体社会の環境と区別される意味での内部であろうか。しかし、その場合には、環境とはもともと全体社会の内部ではなかったのか。つまり、環境は全体社会の外部言及だったはずであり、したがって、社会学は全体社会それ自身であることになる。いずれにせよ、全体社会はみずからを観察するために内部に境界を引いたということであろうか。しかし、その他の機能システムも存在するはずである。社会学はみずからの位置を確定できないことになる(1993c, S.206; 1994, S.479)。パラドクスである。それは、そこでの境界がいわばイマジナルな空間に引かれたフィクショナルな境界だからであろうか³³⁾。観察はみずからの作動を観察できないということであろうか(1993c, S.211f.)。

もちろん、境界を設定しないことも可能である。しかし、その場合には、指し示すことはできず観察は不可能である。それゆえ、Spencer-Brown の『形式の法則』は、命令から始まらざるをえなかったのであろう。

註

- 1) 同様の指摘としては、(1984, 訳806頁)を見よ。ちなみに、Gripp-Hagelstange によれば、本書のタイトルは「社会システム」であり、「社会システム理論」ではないという(1995, S. 10)。現在の Luhmann がそのように言いきれぬかどうかについては、判断を避けたい。
- 2) Stäheli は、コードを、システムの統一そのものをあらわすのではなく、システムの統一性の Indikator であるとしている(1996, S.267)。
- 3) ここでは、自己言及と対をなす Fremdreferenz の訳語として、「外部言及」という表現を用いてみたい。「他者言及」という表現が、他の人間を示すような印象をあたえやすいため

ある。英語では、external reference という訳語が当てられている(たとえば、1993b, S. 772)。ちなみに、論点を先取りするならば、自己言及と外部言及とはシステム内部で構成された、システムと環境との区別を意味する(1989, S.267; 1993a, S.76f.)。これにたいして、Luhmann は、外部からみた場合に画定される対象システムとその環境の境界については、「差異」(Differenz)という表現を用いることがある(1996a, S.24)。

- 4) Luhmann は、第一段階の観察、第二段階の観察ばかりでなく、さらには第三段階の観察についても言及しているが(たとえば、1990a, S.485, 499, 509; 1993a, S.547; 1993b, S.773; 1995a, S.157, 317, 336, 491)、本稿は、かれの表現方法に忠実にしたがっているわけではない。
- 5) Popper の反証可能性とのかかわりでは、(Luhmann 1991a, S.91)を参照せよ。
- 6) システムがみずからと環境との境界をどこに引くかということは、システム自身の反省能力と、そうした反省を支えるさまざまな条件にかかっているように思われる。
- 7) オートポイエーシス概念の Maturana/Varela(1980)からの借用にあたっては、空間的な要素は当然のことながらぬけおちている。意味的世界では空間的な境界設定はあまり重要性をもたないためであろう。
- 8) Luhmann はこの事態を称してパラドクスであるということがある。私見では、最近の Luhmann は「パラドクス」ということばを多用しすぎているように思われる。かつて、「機能」などということばの多用や、参考文献の示しかたについて Luhmann 自身が認めていたように、これはかれ自身の記述スタイル(=戦術)によるものかもしれない。Ruhloff(1996)は、教育システムとその環境内の他のシステムとの関係で Luhmann が指摘したパラドクスについて、パラドクス概念を用いなくて定式化できると指摘している。
- 9) ただし、認識には誤りの可能性がふくまれるものとされている(1988b, S.21; 1990a, S.16)。
- 10) このこととの関連で、Luhmann は、(Spencer-Brown 1994)を参考文献にあげることが多い。Spencer-Brown によれば、なにかを指し示すためには区別が必要である。つまり、区別がなければいかなるものも指し示すことはできない(訳1頁)。ただたんに指し示すことはできないのである。しかし、区別だけでも不十分である。区別された両側のどちらを指し示しているかわからないからである。たとえば、Spencer-Brown にしたがって円を描いたとしても、それだけではその内側を指したのか外側を指したのかは不明である。したがって、指し示すことが可能となるためには、本来は少なくとも二つの境界がなければならないものと思われる。この例でいうならば、円の内と外とを画する境界と、指し示される対象(この場合は円の両側)と指し示しを行なう観察者との境界である(Luhmann 1993a, S.52; 1992b, S.128)。Spencer-Brown の「最初の区別」(1994, 訳3頁)では、これが圧縮されたかたちであらわれていると思われる。すなわち、観察者が円の外側に位置し、指し示される対象が円の内側であるとされているのである。Luhmann の表現を用いるならば、円の内側を指し示すことは外部言及であり、円の外側を指し示すことは自己言及ということになる

が、Spencer-Brown の「最初の区別」では、まずは円の内側を指し示す外部言及だけが問題にされていると思われる。Luhmann による『形式の法則』の受容には変化がみられるが、本稿でそれをあとづけることはできない。いずれにせよ、のちに述べる再参入もふくめると、『形式の法則』は、Luhmann 理論の認識論的基礎の重要な部分をカバーしている。すなわち、観察が区別と指示により定義されているということ、システムと環境のちがいをふくめ観察が内的構成としてなされているということ、そして、モノログというかたちではあるが、第二段階の観察と同じ結論が導かれているということなどである。Luhmann は、時間や意味についても『形式の法則』に依拠しながら解明しようとしている(意味については、たとえば、1996b, S.8ff. を見よ)。なお、かならずしも著者たちの意見が一致しているわけではないが、Baecker の編著(1993)は、『形式の法則』へのすぐれた入門書となっている。

- 11) 一般的にいうならば、システムを観察するさいに用いる区別が、システムと環境の区別でなければならないということはない。システムと要素の区別であれ、システムと行為の区別であれ、システムと自由の区別であれ、システムを観察するには十分である。ただし、Luhmann の場合には、システムと環境の区別である。
- 12) 心理システムと社会システムとの区別については、(1988e, S.897)を参照せよ。文字が物理的およびコミュニケーション的な二重のメルクマールをそなえていることについては、(1993a, S.246)を見よ。
- 13) これについては、註 32) を見よ。
- 14) 心理システムと社会システムの構造的カップリングについては、Luhmann は、(1990a, S.44ff.)ではおもに言語をとりあげている。また、(1991c, S.174f.)では、Person が構造的カップリングに役だつものとされている。
- 15) 本稿では、マスメディアや社会運動などによる、全体社会のさまざまな自己記述には言及されていない。
- 16) 現実については、(1996a)がくわしい。
- 17) エコロジーについての議論は、まさにこのことを明瞭に示している。というのは、全体社会の環境とは、全体社会の外部言及にはほかならないからである(1986a; 1990a, S.344)。
- 18) 記号の使用とそれによって示される対象との関係については、たとえば、(1995d, S.94f.)を見よ。
- 19) 人間の身体と意識の関係については、(1991c, S.173)にわかりやすい記述がある。
- 20) こうした立場からする研究と統計的方法を用いた研究とのちがいについては、(1993a, S.538ff.)を見よ。
- 21) この二元コードは機能システムの境界をはっきりさせるはたらきをしている(1991b, S.942)。また、部分システムに固有な作動が二元コードに還元されるコミュニケーションであるとするならば、全体社会も二元コードをもっているのではないかと推測される。Luh-

mann は、言語の肯定・否定というコードが、全体社会の成立にとって不可欠な機能をはたしているとしているとし(1995a, S.304)、また、コミュニケーションのコードとしては、たとえば、受け入れ可能・受け入れ不可能、または、適切・不適切という区別をあげている(1996a, S.172)。これにたいして、Krause は、社会システムにとって、コミュニケーション・非コミュニケーションの区別がコードとしてのほたらきをしているという(1996, S.39)。

- 22) Luhmann は、家庭についても機能システムであると考えている(1990b, S.196f., 222)。しかし、家庭に固有の二元コードについては、筆者があたったかぎりでは、あまりはっきりしていないようである。Krause は、部分システム(全体社会の機能的に分化した部分システムのことであると思われる)とは異なるシステムとして、家庭を親密な関係、社会運動、芸術などと並置して、家庭のコードとして成員・非成員の区別をあげている(1996, S.37)。ちなみに、芸術のコードについてもあまり歯切れがよくないように思われる。
- 23) ここで注意しなければならないのは、すでに述べたことであるが、二元コードの二つの値の区別と、システムと環境の区別とが重なり合うものではないということである。具体的にいうならば、たとえば法の二元コードである法と不法の区別の一方の値である法を法システムに属するものとし、不法を法システムの環境に属するものとすることはできない、ということである。また、科学システムの内的作動は真理であり、非真理はその環境であるとするのも同じようにできない。Luhmann は、「コードの否定的価値を肯定的価値から分離する内的境界は、システムをその環境から分化させる外的境界ととりちがえられてはならないのである。換言するならば、コードの差異は、自己言及と他者言及の差異と直交する」(1996a, S.36. 同様の指摘としては、たとえば、1992a, S.29, 40; 1995a, S.306 を見よ)としている。
- 24) ここで注意しなければならないのは、要素レベルでの基礎的自己言及と、システムのアイデンティティが問題とされる、システム・レベルでの自己言及との区別である(1994, S.478)。
- 25) コードとプログラムの区別については、たとえば、(1986a, S.75ff.; 1993a, S.165ff.)を見よ。
- 26) オートポイエーシス・システムの開放性とは、このような内的に構成された環境(いわば、イマジナルな環境)にたいする開放性をも意味しているように思われる(1993a, S.83ff.)。こうした意味では、システムの閉鎖性と開放性が矛盾しないのは当然であろう。Luhmann によれば、この意味でのシステムの開放性は、自己言及と外部言及といういわばイマジナルな区別にもとづく開放であるわけであるが、それにもかかわらず、大きな意義をもっている。すなわち、それがオートポイエーシスの継続や近代的選択の前提となっているからである(1996b, S.14f. また、1993a, S.555 も参照せよ)。また、Luhmann は、通常の場合システムは環境にすでに適応してしまっているとしているが(1990a, S.563; 1991c, S.174)、このさいの適応とは、たとえば物理的・化学的・生物学的なレベルでの環境にたいする適応を意味しているのかもしれない。いずれにせよ、メディアとしての意味の解明なくしてはこうし

た問題に明確な判断を下すことはむずかしいであろう。

- 27) (Luhmann 1985)を見よ。また、(三上 1990)も参照せよ。この観察者との関係で、最近のLuhmannには、一度は拒否したHusserlの現象学に再びその意義を認めようとする傾向がみられる(1996b, S.6)。観察者は、自己の一部を観察対象から除外し不可視化しなければ、すなわち、そうした意味で超越的にならなければ、自己を観察できないからであろう。
- 28) このようなLuhmannの立場にたいして、それでは統合を説明することはできないとする批判としては、たとえば(Bendel 1993)を見よ。
- 29) ただし、同じくオートポイエーシス・システムではあっても、組織や相互作用の場合は、他の組織や相互作用とコミュニケーションすることができるとされる(1988e, S.903, Anm.10. また、1987, 116 頁; 1990a, S.672 も参照せよ)。また、近代社会の多くの組織は機能システムに組み込まれている(1990a, S.678. 同様の指摘としては、1995c, S.22 を参照せよ)とされる以上、間接的にはあるが、機能システム間のコミュニケーションもあるのではなかろうか。
- 30) たとえば、(1991b S.939f.)では、政治のコードを *machtstark/machtabhängig* としているようにもうけとれる。
- 31) Luhmannの知識社会学的研究を「理解社会学」と言いかどうかはともかく、歴史的研究所をはなれたとしても、「理解」のもつ重要性は無視しえないであろう。それなくしては、コミュニケーションは成立しないのだから。
- 32) もちろん、外部からの観察の可能性は残されている。心理システムが存在するからである。Luhmannにしたがうかぎり、心理システムによる思考も社会システムによるコミュニケーションも、言語を用いた作動である。たとえその作動の種類が異なるとしても、それはいわばデジタルとアナログの差であり(1990a, S.39f.)、情報的に一方から他方への通路が完全に閉ざされているとは思えないからである。たしかに、Luhmannのように、コミュニケーションの作動には伝達と理解にそれぞれかかわる複数の心理システムが必要であるとするかぎりは、あるひとつの心理システムによってコミュニケーションが成立することは不可能であろう。しかし、理解にかかわる心理システムは、情報と伝達を区別できるシステムでもある。その理解を伝達することにより、そのコミュニケーション行為が心理システムの統制を離れるとしてもである。Luhmann自身も、コミュニケーションの創発ということをのぞけば、コミュニケーションの3つの契機についてはすべて心理状態のレベルで記述できているのである(1988e, S.887; 1990a, S.38)。
- 33) もちろん、Luhmannは、そのさい恣意的な境界ではなく、独自の作動のネットワークによって画される境界を用いようとしているのであるが(1992b, S.120)。

文献

Baecker, D., Hrsg. (1993): *Kalkül der Form*, Frankfurt a. M.

- Bendel, K. (1993): Funktionale Differenzierung und gesellschaftliche Rationalität. Zeitschrift für Soziologie, Jg.22, H.4, 261-278.
- Durkheim, E.(1912): Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie, Paris. (古野清人訳『宗教生活の原初形態』 岩波文庫 1975)
- Fuchs, P. (1994): Der Mensch - das Medium der Gesellschaft? S.15-39 in: ders/Göbel A. (Hrsg.), Der Mensch - das Medium der Gesellschaft? Frankfurt a. M.
- Gripp-Hagelstange, G. (1995): Niklas Luhmann, Eine Einführung, München.
- Kneer, G./Nassehi, A. (1993): Niklas Luhmanns Theorie sozialer Systeme, München. (館野受男、池田貞夫、野崎和義訳『ルーマン 社会システム理論』 新泉社 1995)
- Krause, D. (1996): Luhmann-Lexikon, Eine Einführung in das Niklas Luhmann mit 25 Abbildungen und über 400 Stichwörten, Stuttgart.
- Luhmann, N. (1984): Soziale Systeme, Grundriß einer allgemeinen Theorie, Frankfurt a. M. (佐藤勉監訳『社会システム理論 (上・下)』 恒星社厚生閣 1993 1995)
- (1985): Autopoiesis des Bewußtsein. Soziale Welt, Jg.36, 402-446.
- (1986a): Ökologische Kommunikation, Kann die moderne Gesellschaft sich auf ökologische Gefährdungen einstellen? Opladen. (土方昭訳『エコロジーの社会理論』 新泉社 1987)
- (1986b): Die Codierung des Rechtssystems. Rechtstheorie, Jg.17, 171-203.
- (1986c): Codierung und Programmierung, Bildung und Selektion im Erziehungssystem. S.154-182 in: Tenorth, H.-E. (Hrsg.), Allgemeine Bildung, Analysen zu ihrer Wirklichkeit, Versuche über ihre Zukunft, Weinheim; München.
- (1987): Autopoiesis als soziologischer Begriff. S.307-324 in: Haferkamp, H./Schmid, M. (Hrsg.), Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung, Beiträge zu Luhmanns Theorie sozialer Systeme, Frankfurt a. M. (馬場靖雄訳「社会学的概念としてのオートポイエーシス」『現代思想』第21巻第10号所収)
- (1988a): Die Wirtschaft der Gesellschaft, Frankfurt a. M.
- (1988b): Erkenntnis als Konstruktion, Bern. (土方透、松戸行雄 共編訳『ルーマン、学問と自身を語る』 新泉社 1996)
- (1988c): Organisation. S.165-185 in: Küpper, W./Ortmann, G. (Hrsg.), Mikropolitik, Opladen.
- (1988d): Neuere Entwicklung in der Systemtheorie. Merkur, Jg.42, H.4, 292-300.
- (1988e): Wie ist Bewußtsein an Kommunikation beteiligt? S.884-905 in: Gumbrecht, H. U./Pfeiffer, K. L. (Hrsg.), Materialität der Kommunikation, Frankfurt a. M.
- (1988f): Closure and Openness: On Reality in the World of Law. S.335-348 in: Teubner G. (ed.), Autopoietic Law: A New Approach to Law and Society, Berlin; New York.

- (1989): Gesellschaftsstruktur und Semantik. Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft Bd. 3, Frankfurt a. M.
- (1990a): Die Wissenschaft der Gesellschaft, Frankfurt a. M.
- (1990b): Soziologische Aufklärung 5, Konstruktivistische Perspektiven, Opladen.
- (1990c): Paradox of System Differentiation and the Evolution of Society. S. 409-440 in : Alexander, J. C./Colomy, P. (ed.), Differentiation Theory and Social Change, Comparative and Historical Perspectives, New York.
- (1991a): Soziologie des Risikos, Berlin ; New York.
- (1991b): “Ich denke primär historisch”, Religionssoziologische Perspektiven. Deutsche Zeitschrift für Philosophie, Jg.39, H.9, 937-956.
- (1991c): Die Form “Person”. Soziale Welt, Jg.42, H.2, 166-175.
- (1992a): Beobachtungen der Moderne, Opladen.
- (1992b) Die operative Geschlossenheit psychischer und sozialer Systeme. S. 117-131 in : Fischer, H. R./Retzer, A./Schweitzer J. (Hrsg.), Das Ende der großen Entwürfe, Frankfurt a. M.
- (1993a): Das Recht der Gesellschaft, Frankfurt a. M.
- (1993b): Dekonstruktion as Second-Order Observing. New Literary History, Vol.34, N. 4, 763-782.
- (1993c): Die Paradoxie der Form. S. 197-212 in : Baecker, D. (1993).
- (1994): Gesellschaft als Differenz, Zu den Beiträgen von Gerhard Wagner und Alfred Bohnen in der Zeitschrift für Soziologie Heft 4(1994). Zeitschrift für Soziologie, Jg.23, H.6, 477-481.
- (1995a): Die Kunst der Gesellschaft, Frankfurt a. M.
- (1995b): Paradox of Observing System. Cultural Critique, N.31, 37-55.
- (1995c): Kausalität im Süden. Soziale Systeme, Jg.1, H.1, 7-28.
- (1995d): Gesellschaftsstruktur und Semantik. Studien zur Wissenssoziologie der modernen Gesellschaft Bd. 4, Frankfurt a. M.
- (1995e): Soziologische Aufklärung 6, Die Soziologie und der Mensch, Opladen.
- (1996a): Die Realität der Massenmedien, 2., erweiterte Auflage, Opladen.
- (1996b): Die Sinnform Religion. Soziale Systeme, Jg.2, H.1, 3-33.
- (1996c): Das Erziehungssystem und die Systeme seiner Umwelt. S.14-52 in : Luhmann, N./ Schorr, K.-E. (1996).
- (1996d): Observing Re-entries. S.290-301 in : Preyer, G./Peter, G./Ulfig, A. (Hrsg.), Protozoziologie im Kontext, “Lebenswelt” und “System” in Philosophie und Soziologie, Würzburg.

- Luhmann, N./ Schorr, K.-E. (Hrsg.) (1996): Zwischen System und Umwelt, Fragen an die Pädagogik, Frankfurt a. M.
- Maturana, H. R./Varela, F. J. (1980): Autopoiesis and Cognition, The Realization of the Living, Dordrecht. (河本英夫訳『オートポイエーシス——生命システムとはなにか』 国土社 1991)
- 三上剛史(1990):「差異的自己の同一性——ルーマン、ミード、ポスト構造主義——」『ソシオロジ』第35巻2号。
- Ruhloff, J. (1996): Pädagogik und anderes. Transzendental-kritische Bemerkungen zu Niklas Luhmann, » Das Erziehungssystem und die Systeme seiner Umwelt «. S.53-74 in: Luhmann, N./Schorr, K-E (1996).
- Reese-Schäfer, W. (1992): Luhmann zur Einführung, Hamburg.
- Spencer-Brown, G. (1994): Laws of Form, Portland. (山口昌哉監修 大澤真幸、宮台真司訳『形式の法則』 朝日出版社 1987)
- Stäheli, U. (1996): Der Code als leerer Signifikant?: Diskurstheoretische Beobachtungen. Soziale Systeme, Jg.2, H.2, 257-281.
- Teubner, G. (1987): Hyperzyklus in Recht und Organisation. Zum Verhältnis von Selbstbeobachtung, Selbstkonstitution und Autopoiese. S.89-128 in: Haferkamp, H./Schmid, M. (Hrsg.), Sinn, Kommunikation und soziale Differenzierung, Beiträge zu Luhmanns Theorie sozialer Systeme, Frankfurt a. M.
- (1989): Recht als autopoietisches System, Frankfurt a. M. (土方透、野崎和義訳『オートポイエーシス・システムとしての法』 未来社 1994)